

政治と宗教研究会より

ロシア政治と宗教

下斗米伸夫

はじめに

今日いただいたテーマというのは、現代ロシアの政治と宗教について話題を提供せよということでした。実は二〇〇〇年初めエルサレムにいき、イスラエルという国におけるロシアのインパクトというものを垣間みる機会がありました。

そこで聖墳墓教会、すなわちキリストのお墓を訪れました。とりまいている各種の教会といるのがあるのですけれども、いくつかの宗派の中でギリシャなどい

くつかの正教の教会があり、正教ではありませんがアルメニア教会があり、コプト教の教会があったりと、イコンの荘厳な教会を含めてとりまいていました。そしてこの都市ではそれがユダヤ教およびイスラム教と並存している。いま三者の宗教の共存をめぐる大問題を起こしているわけですけれども、それが並存している姿にうたれました。改めてもう少し早くこの地にくるべきであったと感じた次第です。

二〇〇〇年はミレニアムでしたが、辞任したエリツイン・ロシア大統領がさっそくエルサレムに出かけま

した。あるいはローマ法王が二百年ぶりに訪問するというように、エルサレム、イスラエルという地が現代の宗教と政治をめぐる状況に与えるインパクトというのは、いうまでもなく大きいわけです。

と同時に筆者は、イスラエルという国自体にある、ある種の「ロシアさ」とでもいうか、そこに興味をもっております。いま人口六百万のイスラエルにこの十年間で百万人のユダヤ系の人々が主として旧ソ連、ロシアから入ってきたわけです。彼らの多くは西岸といつたいわゆる入植地に入っています。しかしそれだけでなく、イスラエルを作った人々、建国の父「ファウンディング・ファーザーズ」たち、いわゆるシオニストと呼ばれる人たちのほとんどが、ロシア帝国にあっていわばマージナルな人々というか、ユダヤ人であつて、したがって多くロシア語を話す人たちでありました。さまざまな時点であの地に集まって、イスラエル建国を行なったということです。つまりイスラエルを構成するさまざまなユダヤ人たちの間で「ロシアさ」というものが何重かに折り重なって出てくる。最近歴

史の見直しということでロシアの文書館から多くの資料が公開されております。たまたま朝日新聞の二〇〇〇年八月一日の夕刊に私が書いたコラムがあります。「ねじれた歴史」というのがそうですが、イスラエル建国を最初に承認した国として、アメリカと並んで実はソ連があることを論じたものです。アメリカは当然のことですが、国家間関係としては実はソ連の承認のほうがかつた。そしてそれだけでなく、スターリンが一九四八年四月、大量の武器をシオニストたちに、経路としてはチェコスロバキア共産党を通じて与えていたということが、新しく出てきている歴史資料の中から証明されつつあります。いうまでもなく冷戦はそのわずか数ヵ月後に本格化、チェコがその粛清の舞台になり、やがてモスクワでもモトロフ夫人やロゾフスキー外務次官などユダヤ系ソ連人たちが追放される、いわゆる戦後の粛清がその頃からさらに激しさを増して、これがいわゆる冷戦起源論の一つの隠れた歴史をなしている。

そういうことを考えるにつけて、モスクワとイスラ

エルでの各種の宗教の折り重なった構図を通じて現代のロシア政治をどうみるべきか考えざるをえないわけです。つまり、イスラエルという鏡を通じてロシアの宗教と政治の絡みが露顕しているともいえます。私は理論家でも宗教の専門家でもありません。しかしいま、モスクワで政治と宗教について語る、あるいは宗教を政治学的に分析する人たちの多くは政治学者たちですが、その多くがつい十年くらい前までは科学的社会主義とかイデオロギーの専門家であつた人たちで、十年たつたら宗教専門家のような顔をしている、あるいは民族問題についての専門家たちになつてゐるわけです。そういう意味で、宗教というものが政治に与えるインパクトについて、ある種の概括的なことはいえないだろうか、そういうことを考えながらここでまとめてみたわけです。

ロシアにおける宗教が政治的に重要であるもう一つの大きな理由として、「ロシアの国民国家形成と宗教」というところで、ジュガノフ共産党議長長の発言を引用しております。「ロシアの国家体制の発生自体が九八八

年の「ルーシの洗礼」という宗教現象と関係している」と、彼は指摘しています。

ソ連が崩壊して十年近くなりますが、ソ連に代わつてロシアという国民国家が形成された。これが市場経済への移行と民主化というものとパラレルに進んでいく、あるいはいくべきだ、あるいはいくはずだという言葉、これが十年ほど前、モスクワでもワシントンでも声高にいわれました。では、ロシアが国民「ネイション」となるということの理由は何だろうか、ロシアが国家であることの理由は何だろうかということを考えてみると、実は決して自明ではないわけです。ロシアは nation-state たりうるのかどうか、これは非常に大きな、あるいはクエスチョン・マークがつく問題です。

ジュガノフもいつているように、ロシアの国家形成というのは実は千年以上前のルーシのキリスト教、特に正教への帰依というものが起源になつてゐる、あるいはキリスト教という角度を通じてロシアは国民国家あるいはロシアの国家形成というものを作つたというある種の考え方があります。いまロシアが世俗国家を

作ろうとしているときに、特にグローバリズムの中で国家を作ろうとしているときにこの宗教という要素は一体どういう意味をもつのだろうか。決してこれは自明ではないわけです。そもそも九八八年にロシア、ルーシが洗礼を受けて、これがルーシ国家の起源だと、百科事典をはじめとしているいろいろな本に書いてあるのですけれども、そういうことが一体どこまで事実なのか、あるいはどこまでがある種のイデオロギーなのか、これは歴史家たちが古来分析しておりますが、なかなか確たる答えはないわけです。

にもかかわらず、ロシア政治と宗教との関係ということ説くに際して、ロシア革命と宗教の関係、オーソドックスつまり正教というもののとの関係が一つの大きな柱であることはいうまでもないことです。

ご承知のようにロシア革命を担った人たちというのは、宗教に対して否定的な、あるいは「理性主義」的な考え方をもっていた。したがってロシア革命の一つの旗印は、国家と宗教との分離であった。ロシアのそれまでの指導的な宗教であった正教というものが、ツ

スターリン体制が少なくとも三〇年代、極めて反宗教的なスタンスをもった政治権力であったのはいうまでもないわけです。

ところが一九四一年六月二十二日、独ソ戦の開始とともにソ連は戦争となり、モスクワが陥落する寸前まで追い込まれたとき、スターリンがむしろ救いを求めたのは、実は宗教であったということはお聞き及びのことだと思います。宗教と民族が復活し、ナポレオンと闘ったクトゥーゾフ將軍とか大祖国戦争という名前でもって民族的なるものがリバイバルする、その中心に置かれたものがロシア正教会でした。正式には一九四三年だったのですが、スターリンとセルゲイ総主教が和解し、宗教のリバイバルを象徴するような立派な文書が出されました。これは特に当時の国際状況でも重要だったわけです。というのもナチスと闘っているセルビアやブルガリアの正教徒に対し、モスクワは第三のローマであるというシグナルが鳴った。

実は二〇〇〇年末、ソ連の国歌がリバイバルするという話ですが、このソ連の国歌というのは、一九四三

アエロパピスムス（皇帝教皇主義）を一つの柱としており、政治と宗教との関係は極めて密接であったし、いまでも実はそうであるからです。逆にいうと、それに対して反逆したロシア革命のイデオログたちが逆に宗教に対して厳しくあたったことはご承知のとおりです。

とりわけ一九二〇年代末から三〇年代になり、遅れた農村ロシアを工業化した社会主義大国ソ連に変えたスターリンは、農民に対する抑圧と攻撃を行なう過程の中で、農村共同体の中心であった教会をいわば解体する、その精神的な中心である僧侶たちを処断する。そして農村の中の豊かな人たち（クラーク）がどこへ送られたかというところ、収容所ですが、その収容所の多くはかつての修道院であったり教会であったわけです。特に三〇年代、ソロフキー修道院という極北の修道院は、最大の収容所になりました。いまモスクワのKGB本部の前に置かれている、全体主義の犠牲者の碑というのが九一年からありますが、ここに置かれている石は、このソロフキー修道院からもってきた石です。

年まではインターナショナルが使われていたのです。その時セルゲイ・ミハルコフという著名な映画・演劇界の大御所がいますが、彼が四三年からのソ連国歌を作った。その息子の映画監督ニキータ・ミハルコフがブーチン大統領の国歌問題のコンサルタントとなっているのですけれども、まさにミハルコフ・シニアが登用されたのは、この一九四三年の宗教との和解というスターリン政治の文脈ということであったわけです。

しかし、宗教に対して非常にプラグマチックであったスターリンとの対比で、特に後継者のフルシチョフが逆に宗教に対して厳しかった理由はまだ十分な説明がなされておられません。けれども、彼がスターリンよりも正教会をはじめとする宗教に対して極めて厳格な、あるいは抑圧的な態度をとったことがよく知られております。逆にいうと、フルシチョフの下で宗教抑圧が行なわれたことが、ブレジネフ時代の反動を呼び起こす。ブレジネフ時代というのはソ連崩壊からみ直して極めて重要な時代だと理解していますが、それはさま

さまざまな宗教・民族・文化・伝統などに対する市民社会レベル——この場合の市民社会というのは、隠れてまだ表には出てこない市民社会と理解したいと思います。——、そういうレベルで、あるいは私の言葉で「第二社会」といつているのですが、その第二社会レベルで宗教リバイバル、あるいはさまざまな異端的な言説への憧れというものをブレジネフ時代は生み出してくる。ブレジネフ時代はそういう意味では二重構造があり、公式イデオロギーが化石化していく中で地下伏流のようなかたちで宗教を軸にさまざまな言説が流れ始める。

私が初めてモスクワに行ったのは七五年ですが、その時例えば復活祭になると深夜放送で突然おもしろい西側の映画をやるのです。なぜかというときみんなが教会にいかないようにするためだという。あるいは逆に物理学者や数学者というような、付き合った人たちというのは、あえて教会を訪れる、あるいは民族的文化的なもののリバイバルを考える、これは必ずしも右派的、ナシヨナリスト的な人だけではないということが私に

はたいへん興味深かったわけです。ですからあの頃からソルジェニツインとかサハロフというような異論派の人たちがさまざまなことをいい出すようになる、一つの大きなきっかけができたのだらうと思います。

一 ゴルバチョフ期の政治改革と宗教

ブレジネフ期からゴルバチョフ期にかけて共産党機関紙の『プラウダ』編集長だったヴィクトル・アフナシエフという方が一九九四年に亡くなりました。一生涯を通じて共産党イデオロギーの宣伝のために闘ったこの人物の葬式が正教であったと最近聞きました。そういうある種の二重構造的なものが、実はゴルバチョフのペレストロイカを生み出し、いまにいたるさまざまなものを生み出す源泉の一つであったのではないかとこのことだろうと思います。ロシアの南部に一九三一年に生まれたゴルバチョフ氏は、スターリンの農民抑圧の犠牲者であり、自分の村の三分の一が餓死したと池田大作氏との対話の中でいっております。そういう村から出てきた人物が政治的なある種の飛躍、つ

まりペレストロイカを考え、そしてそれがいわゆるグラスノスチというものに結びついたこと、これは歴史の事実ということになります。ゴルバチョフのペレストロイカとは何であり、グラスノスチがどういう成果を生んだかということは、ここでは省略したいと思います。

そこで一つの重要な柱だったのが、ゴルバチョフにとっては政治改革であり、そしてグラスノスチを進めるにあたって重要な柱になったのが市民社会の解禁、これは非公式集団ということですが、その最大の標的は宗教をどうやって公認するかでした。実はタイムリミットが迫っていたわけです。というのはペレストロイカが政治改革に結びついた一九八七年から八八年にかけて、実はルーシのキリスト教受礼千年祭というのが行なわれる目前であったからです。この頃から宗教界、あるいはさまざまな市民団体、いまでいうとNGO、NPOだけでなく、ロシア国家あるいはソ連国家の隠れた部分であった正教会もまた、政治的な民主化の波にもまれ始めたわけです。隠れた部分といったの

は理由がないわけではなく、ロシア正教会というのはスターリンと和解した一九四三年以降、エスタブリッシュメントの一部であった。あるいはノメンクラトゥーラの中に総主教を頂点とする正教会というものがきちんと位置付けられていたと理解しております。ピーメン総主教、それからいまのアレクシー二世を含む私たちは、党と政府、特にソ連共産党のイデオロギー部門の中の、宣伝部の中の極めて重要な位置付けをされたいわゆるノメンクラトゥーラであったこと、これはいまは疑う余地のないことです。

しかし、それは公式のイデオロギーとはやや離れたかたちで存在していたものであったとすれば、一九八八年ゴルバチョフはこのノットを切り裂いたわけです。すなわち政教和解がこの段階で初めて成立し、正教千年祭をきっかけとして、ロシア革命後初めてバイブルがロシア語で公式に刷られるようになった。それまでは逆にいうと、バイブルをソ連が印刷したことはなかったわけですが、そういうかたちで出てきました。さらにそれを保障するために、ゴルバチョフは一九九〇

年「良心の自由と宗教団体に關する法律」というものを認めた。そこであらゆる宗教は多元主義的な宗教ということ、等しく平等に扱うということを宣言するわけです。ゴルバチョフ周辺およびリベラルな改革派の人たちが、そういうかたちで宗教と政治にコミットし始めた。非常にリベラルな宗教の最初の法律というものが、この一九九〇年の「良心の自由と宗教団体に關する法律」にみられたわけです。

しかしこのプロセスは同時にさまざまな勢力の自由化をもたらし、それがソ連という枠組みに押さえられないかたちで出てくる。最大の問題は、実はウクライナ問題だったわけです。ウクライナというのはキリスト教が最初にやってきた地域ですが、そこがロシアから抜ける、あるいはソ連からの独立を主張する。ウクライナのノメンクラトゥーラのモスクワに対する独立という要求が、ロシアに現われたエリツインの勢力ともあいまって、ソ連邦という国家を一発の銃声なしに崩壊させた。これが一九九一年十二月二十五日のソ連崩壊であったことはご承知のとおりです。

Fの理論家とモスクワの支持者たち、つまりエリツインのブレインは一刻も早く国营企業経営を民営化し、民間に移すことが良いことだという。その結果起きたさまざまな不平等、混乱、腐敗その他についてはお聞きになっているとおりです。

二 ロシアの国民国家形成と宗教

そういった状況下で宗教というのはどういう意味、位置をしめるのだろうかということです。そういう状況が生み出すさまざまな心理的な空白、あるいはイデオロギー的な混乱、そしてそれを裏打ちするような経済的な崩壊、そして何よりも政治秩序そのものの崩壊をもたらすようなものが宗教の位置を二重・三重に政治化させる。同時にそういった宗教というものを通じてロシアの混乱が浮かび上がってくる、そういう構図があるのではないかと思います。

ごく簡単に制度的な配置をみると、ロシアは現在はいまでもなく宗教国家ではありません。つまりロシア正教は国教ではありません。そうではなく、憲

その後ソ連が崩壊して十年たつわけですが、エリツインの下で一九九二年初め以後経済の自由化、市場経済への移行、当時は同時に民主化と国民国家の建設ということも一つの大きな柱になったわけです。その後起きたことを簡単にいいますと、その時かがけられたスローガン、文明的な市場経済、あるいは近代的な民主化から民主主義へとか、国民国家形成というのが目的とされた。しかしエリツインの下で疑わしい結果しか生み出さず、生産は約四割ぐらい減退し、現在のロシアの国家予算は東京都のほぼ半分、国民の平均寿命は男性に關するかぎり、一九九一年からほぼ五才低下し、五十九才まで低下している。あるいは中国経済と比較しても、プーチンはわざと中国の五分の一といっていますけれども、二分の一か三分の一くらいにロシアの経済は縮小していくわけです。それと同時に貧富の格差が膨大に起き、IMFのすすめた市場経済で民営化を急ぐ。ちょうどスターリンは一九三〇年代国民の経済、経営を国家に渡すのが社会主義であり、これは早ければ早いほど良いと考えたわけですが、IM

法は世俗国家であるということを規定しております。これは旧ソ連の他のすべての国々でも憲法ではそう書いてあるわけです。もう少し正確ないい方をすると、一九九三年憲法の第十三条というのは、国家が特定のイデオロギーをもつことを否定しておりますし、社会組織というのは法の下で平等であるというふうに規定しているわけです。さらに第十四条では、ロシア国家というのは世俗国家であり、国家と宗教は分離し、宗教団体というものもまた社会団体と同様、法の下で平等であるということ、つまり、宗教に關する憲法コメンタリーの表現を引用しますと、宗教は国家に關与しないということを明言しているわけです。しかし、スターリン時代の憲法と同様、ロシアの憲法というものもが一体どういう現実的な意味が政治に対してあるのだろうか、このへんはたいへん問題のなところでは

話を宗教のほうに絞って続けますと、一つの転機になったのが一九九七年七月の「良心の自由と宗教諸団体法」という法律でした。エリツイン前大統領は二〇〇〇年の秋に回顧録『大統領の馬拉ソン』を書いたの

ですが、この法律についての説明をかなり長々としております。それによると、その法律は議会四百五十人のうち三百七十人の議員が支持した。そして九つの宗教団体がこれを支持していた。その背景としてはソ連が崩壊した結果、西側あるいは東側のさまざまなセクトあるいは外国の宗教団体が跋扈するような事態がおとずれ、したがって宗教を野放しにすることが逆にさまざまな混乱を生み出すということになってきた。したがってこの法律で多少制限するということをエリツインは回顧録の中で縷々例を挙げて説明しているわけです。つまり、この一九九七年七月法というのはかなり論争的な状況の下で生み出された。一九九六年に下院が出した草案というのは、一九九〇年の法に従ったような、どちらかといえばリベラルな宗教観、国家と宗教の分離を前提としたようなものがあつた。けれども、一九九七年案はかなり強硬的な法律です。そして後で申し上げるように、その運用ではさらに混乱がみられるわけです。

形式的なことを最初にいいますと、正教だけ「全口

他にイスラム教・仏教・ユダヤ教を位置付けています。

これに対しここに挙げられないようなプロテスタントやカソリックなどは他の「非伝統的宗教」という第三のカテゴリーに分類されます。こういうかたちで位置付けられているわけです。四番目としてセクトという存在が位置付けられています。つまり九〇年法に法の下で宗教団体もどれも等しく平等であるという考え方があるとすると、ここにある種のエラルヒーが想定されているわけです。そういうヒエラルヒーの頂点に立つのが、いうまでもなく正教ということになります。しかもこの法律においては、各宗教団体は一九九九年十二月末までに司法省に登録することを要請しています。大体五十七宗派、一万七千ほどの宗教団体が、九九年から二〇〇〇年にかけての時点で存在しています。そのうち二〇〇〇年初めまでに登録を済ませたものが半分くらいしかなかったものですから、あわててプーチン政権はさらに登録の期間を延長しております。それがいくつかの問題を生み出すわけです。この一万七千のうち約半数が正教で、一八%程度がイスラム教、

シアの歴史的、精神的、文化的に不可欠な部分」として特別扱いにしました。これを支持したのはどちらかといえばリベラル改革には批判的な知識人でした。例えばツイブコ氏はゴルバチョフとも親しい、やや民族派的な政治学者ですが、ツイブコ博士をはじめとしてミグラニャンなど代表的な政治学者たちもこの法案に賛成する。賛成する理由として彼らがいうには、クリントンやローマ法王が反対するような法律に対しては、逆に支持しなければいけないということでした。現在のロシアの知識人たちのアメリカに対する、あるいは西側に対するある種の幻滅を反映したような論拠が出てきたわけです。ちなみにこの法律に対してエリツイン自身は、アレクシー二世がこの法律に個人として賛成であるというふうにいってきたが、自分としては憲法の趣旨と、この法律の中身とが必ずしも一致していないからその辺が問題であると考えた、と弁解がましいことをいっているわけです。つまりこの法律は正教に一つ特別な地位を与えているわけです。

二番目として、「伝統的宗教」というかたちで正教の

二〇%程度がキリスト教の正教以外のカトリック・プロテスタント諸派など、ユダヤ教と仏教は一%ずつといわれております。その他セクト、例えば「エホバの証人」などが一・五%、二十五万人といわれます。それほど少なくないグループがあるわけです。ちなみにモスクワ市のダイレクトリーに登録されている宗教団体は、アルメニア教会と仏教が一つずつ、カトリックが四つ、イスラムが六つ、プロテスタントが十、ユダヤ教が四つ、これはその下に下部があるわけですが、そういう分布となっております。以上述べたことの中でもロシア正教会の比重が極めて高いということがいわれております。ある研究者は実質は準国教だといっておりますが、そこまでいえるかどうかはともかく、非常に大きな地位をもっております。

しかし世論レベルではやや低下します。九九年ぐらいの世論調査をみると、正教、つまりオーソドックスは意外に少なく五五%、これに対して三一%は無宗教だと答えています。あるいは九九年のモスクワ大学の調査によると、世論調査の四三%までしかオーソドッ

クスとはいわない。しかもオーソドックスの人できちんと教会に行く人は多くはないわけです。にもかかわらず、九七年の法律その他では、正教に非常に大きな地位と役割を与えているわけです。

もともと典型的にこれが政治面で現われたのは、九六年のエリツィン大統領の就任式でして、就任式ではアレクシー二世とエリツィンとが一番前に並んだわけです。これはさすがに批判をあびて、二〇〇〇年のプーチン大統領の就任式では、他の宗派の代表が数人並べられた中で一番高いところにアレクシー二世は置かれました。正教の僧職者たちは軍隊や国家機関の中でも、ある種の宗教的サービスを認められています。二〇〇〇年夏の原潜クルスクの事件でも、正教会の代表がサービスを行なったわけです。しかし、例えばチェチェンのイスラム教徒が亡くなったとしても、イスラム教徒にそういう特権が与えられているわけではない。ですから「法の前の平等」とデファクトな特権との違いをどうやって合理化するのだから。いろいろないい方ができるわけで、法の前では平等だけれども歴史の前

では不平等である、などともいいます。ソルジェニツインは「他の宗教が西側から極めて多大な資金を援助してもらっているのに対し、我々の宗教は非常にみすばらしいものになっている。そういうある種の不平等というのは止むを得ない」などということを書いてるわけです。

しかし実は正教会なるものもさまざまな政治的な問題を抱えているわけです。一つはアレクシー二世がかかっているタイトル、すなわち「全ルーシとモスクワ」総主教という肩書きです。現在の東方正教会は十三の独立正教会からなっており、キプロス、ギリシア、アルバニアなどがあります。この中で「全ルーシとモスクワ」の総主教とはどういうことか。それはエストニアもウクライナもベラルーシも実は全ルーシに入るのです。全てのルーシということです。ウクライナの旧名はマロルーシ（小さなロシア）、ベラルーシは白いロシアということ、すなわち正教のアイデンティティからすると、全てのルーシということは大・小・白のルーシ、これを合わせたものがあてはまります。単にそ

れだけでなくタタール人もエストニア人も正教会に帰依したものは全て、このルーシのコントロール下に入るとというのがこのアイデンティティであります。さらにいえば、ロシアがそれを正当化する一つの論理に、モスクワは「第三のローマ」というものもある。すなわちコンスタンチノープルが陥落してモスクワの総主教というものが東方正教会のトップとなったという、これは必ずしも全ての正教会で受け入れられた教義ではないのですが、しかしロシアの中ではそういう考え方があるわけです。ということは、いうまでもなくソ連崩壊後のナショナリズムということと正教の存在自体とは、矛盾を引き起こす存在になっていることになり

ます。

ウクライナについて申し上げますと、ウクライナというのとはもともと辺境という意味で、辺境というのはモスクワからみた辺境ではなく、ポーランドからみた辺境であった。ポーランド・リトアニア王国から独立してモスクワと手を組んだ。したがってキエフ・ルーシが崩壊した後、ウクライナでの宗教はカトリックと

正教とが合わさったようなユニエイトという中間的なものでした。東大の中井和夫氏は、そういうユニエイト的なアイデンティティというのは西と東、カトリックと正教を結ぶアイデンティティだというふうに評価していますが、ロシアの正教徒や歴史家のグシリョフなどはユニエイトとは自分たちの宗教も守りえなかった「弱い連中」だとみるわけです。

それはともかく、そのウクライナが九一年ソ連崩壊のいわば第一バイオリンを弾いたわけですから、そのウクライナにおける正教というのは何か、ということになります。これはただちに政治化したわけです。その結果ウクライナの正教会は大きく二つに分岐しました。すなわちウクライナ正教会と全ルーシ正教会とに分かれてしまったわけです。いうまでもなく多数派はウクライナ正教会、もう少し正確に言えばユニエイト的なものがさらにあるわけですが、この問題には触れないことにします。

またエストニア正教会にはもう一つ重要な問題が絡んでいます。というのはアレクシー二世という人物は、

一九二九年エストニアで生まれてエストニアの正教会の修道院からモスクワにやってきた人物であります。ところが、ナショナリズムが台頭して、祖国エストニアは別の国になってしまった。したがって、東方教会では一民族一教会的なたちで組織されるものですから、エストニア正教会はたしてありうるのか。ウクライナの正教会問題とエストニアの正教会問題はロシアの正教会問題と重なっております。

実は「ロシア」は形容詞でいうとルースキーとロツシースキーという二つがあります。ちょうどブリテンとイングランドの違いのような問題に同定できます。ロツシースキーというのは国家概念だといわれておりますが、この背景には宗教概念があります。ロツシースキーというのはあまりエモーショナルな感じのない国家概念を意味するわけですが、ラフにいつてオースドックスの世界と重なります。それに対しルースキーというのは、もう少しエモーショナルな形容詞であり、ちょうどイングランドのようなものです。この二つの概念が区別されているわけですが、いっ

たい現在のロシア連邦のロシアというのは、果たして宗教的に正統化できるのかどうか。実はアレクシー二世のポリティックスというのがそこで出てくるわけです。

つまり、アレクシー二世は国家とともに生きる宗教の担い手であり、したがって政治権力との関係は極めて密接です。と同時に非常に微妙なところで政治権力と距離をおくことがあります。例えば一九九六年、エリツイン大統領とジユガノフ共産党議長が大統領選挙を戦ったとき、エリツイン周辺でユダヤ人たちがかなりコミットしたこともありましたが、ある段階でアレクシー二世は反対派のジユガノフとの関係を強めました。先程のジユガノフの発言の背景には、教会と共産党との和解のようなことがあります。あるいはエリツイン後をねらう有力な政治家としてモスクワ市長ルシコフという人物がおります。この人はエリツイン的な急進改革に距離を置いた人物で、より国家主義的な人物でした。

このルシコフは何をやったかというところ、宗教の利用

です。救世主キリスト聖堂という、クレムリンと同じ

高さの、ナポレオン戦争勝利を祝った大きな聖堂が十九世紀にモスクワに作られました。これは、戦闘的無神論という反宗教運動が強まったスターリン下の一九三一年に爆破されました。この破壊がまさにスターリンの政治を表したのと同様に、ルシコフは救世主キリスト聖堂復活というものを強いロシアの復活、エリツイン的な括弧つきリベラルなものに対して大国ロシアの復活という文脈の中でこの聖堂復活キャンペーンをやりました。いまこれはモスクワでも目立つ建物になりました。そういうかたちで宗教を政治に利用するということがみられるわけです。

もう一つ、アレクシー二世と政治の関係でおそらく問題は、プーチンとの関係です。

先程の国歌をリバイバルするということに、アレクシー二世はいまのところ否定的です。ソ連時代の国歌というのは、宗教否定の問題があるのではないかというのがアレクシー二世の批判で、これをプーチンがどういうふうにするかは興味深い問題です。

三 各派宗教

「伝統的宗教」といわれるイスラム教・仏教・ユダヤ教については問題点を指摘するに限りたいたいと思います。旧ソ連でのイスラムの役割をかなり高く評価する言説が日本の一部の人たちにみられますが、私はロシアの中でイスラムの宗教的なりバイバルというのは、政治的にそれほど大きいものではないという説です。よくチエチェンなどでみられる民族対立、あるいは山内昌之氏が『ラディカル・ヒストリー』の中で、タタールスタン共和国での宗教リバイバルについて書きました。しかし私のみるところ、シャイミエフという地元元共産党の権力者がいわば宗教カードを使った、宗教というよりエスニックなカードのほうが大きかった。その証左は、イスラム政党というのがこの十年ぐらゐの選挙の中でほとんど成功していないことです。むしろイスラム勢力を特徴づけるのは政治的分断であり、あるいはチエチェンの政治プロセスをみておきますと、民族ですらない、チエチェン民族が一体として

ロシアと戦っているという構図は、モスクワがおろかな政策をやったときだけ生じるにすぎず、残りは全て氏族社会（ティューといますが）、拡大家族のような民族的な団結ではない。これがいわばさまざまな私たちの問題を起こしているのだという理解を筆者はしております。たしかにチエチェンには、ワッハブ主義とロシア人たちが呼ぶサウジアラビアからのイスラム系の圧力があります。これは同時に資金、武器そして人材が入ってきて、地元民とさまざまな対立を起している。さらにその背景に石油利権問題も絡みます。いずれにしろ、イスラムというのは政治的ファクターとしてはロシアの政治ではそれほど大きな問題ではないのだろうと考えています。

次に、ロシアにおけるユダヤ教の問題とは何なのかというのはいへんやつかいなことです。実は千年前にキエフにルーシができる頃に、いまのチエチェン共和国のちよつと南辺りですが、ハザール、ハザール王国という国があつて、トルコ系の民族の国家ですが、ここにたしかにユダヤ教徒が入って、国教化したので

す。なぜ王様たちがユダヤ教徒になったのかという話を少し朝日新聞の一月十二日夕刊で紹介しました。このハザールの民がその後どうなったかという話はいへんおもしろい問題です。ちなみに中国史では北宋の時代、まさにこのハザールが崩壊した後にユダヤ人と称する人たちがやってくるわけです。

ロシアにおけるユダヤ人問題というのはもちろん、宗教の問題、セム系の民族の問題、あるいは母系社会的な問題などさまざまな問題が絡んでおります。ただ、ユダヤ人たちがロシアの、あるいはソ連の政治経済に、あるいは学術文化に与えたインパクトについては、やはりエリツイン政治というものでユダヤ人のファクターがかなり重要である。エリツイン時代はこれ抜きにはほとんど理解不可能だろうとみております。いまモスクワを握る新興財閥とか金融集団とかメディア王とかさまざまな人たちが、エリツイン一族の周辺にかたまつてさまざまな政治・経済ドラマを展開してきました。そして九七年九八年の金融危機の中でアメリカ経済にまで波及しかなかったほど、モスクワとウ

ォールストリートとの関係が密接であつたことはお聞き及びのとおりです。これを宗教の問題というかたちで理解すると、ユダヤ人教会に属する、グシンスキーという人物、ロシアの独立系のテレビ局およびメディアを握っていたリーダーですが、あるいは彼とは対抗しているベレゾフスキーという金融と流通部門をコントロールした人物がエリツイン政治のキー・ファクターとなつておりました。九六年のエリツイン選挙というのは実は彼らのもつていた金融資本、それからメディアの力をもつてエリツイン政権二期ができたということはいまでは常識です。

これ以上になると複雑な問題が出てきます。逆にそのことゆえに、いまのロシアのメディアとかあるいは反対派のメディアの中で、反シオニズムといういい方でエリツインおよびその周辺に対する批判勢力が生じます。それが経済改革論争などと絡んで難しい問題を出しているわけです。そしてその片方の極では反ユダヤ主義になつて出てきたのです。

問題はこういう反ユダヤ主義が、特に経済改革など

であまりうまくいっていない特定の地域、例えばロシアの南部、あるいは極東などで強い政治潮流になつている。そしてそれが時に特定の勢力と結んで出てくる、反ユダヤ主義集団というものがロシアの政治に大きな影響を与えるようになりました。ちなみに現在のブーチン政権はどうしているかというと、グシンスキーとベレゾフスキーという二人の金融王たちに対して攻撃していることはご承知のとおりですが、同時にユダヤ人教会を二つに割って、より伝統主義的な正統派のユダヤ教徒たちを重用して、この二つのグループを分断することにブーチンは成功しました。そういうかたちでブーチンはデイバイド・アンド・ルールで臨んでいるわけです。

次に「非伝統的宗教」ですが、市民社会の中でのゼクテ（宗派）とキルヘ（教会）ではありませんけれども、まさにゼクテであるようなグループ、これはソ連崩壊後あるいはその前ぐらいから、滔々たる勢いで入ってきました。エホバの証人をはじめ、ルター派、プレスビテリアン、メソジストなどさまざまなグループが入

ってきたわけです。しかし同時にそれだけでなく、オウム真理教だとか新興宗教もあります。オウム真理教問題とは日本人からすればロシアの混乱がもたらしたものと理解しているわけですが、ロシア人たちはあれは日本人がもたらした文化的影響だといっているわけです。

それはともかく、現在当局は「全体主義セクト」、あるいは危険なセクトというカテゴリーを作り、こういう宗教集団に対しかなり制約的な動きに出ているわけです。制約的とはどういうことかという、法的にはこういう伝統的宗教団体も登録して十五年間は試行の期間となる。したがって登録したとしても、土地の所有や銀行口座開設、文献の配布とか海外から司祭を呼んで説教するなどということに対し、かなり組織的な制約が入っているわけです。これはちょうどロシアの政党作りと同じなのですが、宗教組織というものは三つの支部と各支部に十人以上のロシア人がいないと登録させない。すなわち外国人がやってきて勝手にやっているようなものは認めない、というようなことにな

っています。例えばモルモン教徒はトムスクで土地を取得することを禁止されました。こういう例はきりがないのですが、その背景に正教と地元権力のさまざまな制限的な態度があるわけです。いまのロシアは実態的には統一国家ではありません。統一国家にしようというのはプーチンの夢ですが、地方は群雄割拠しているような状況で、現在八十九の地方団体のうち、州とか共和国ですが、このうちの三十は極めて制限的な立法措置をとっていて、モスクワの司法省も気にするほどであるということです。

ここまで宗教を一瞥したわけですが、それではそういうことに対して世論はどうなっているか。これはさまざまなことがあります。ロシア正教に特権的な地位を与えるあるいは伝統的な宗教に与えることに対して世論はかなり批判的で、どこの世論によっても違うのですが、ある世論調査によると、全ての宗教は平等であるべきというのは七四％の支持、宗教にはほとんど関心がない一・三％、他の宗教は嫌いとか否定する九％、というような最近の世論調査の結果です。か

なり宗教の実態と異なった状況がみられると思います。先ほど申し上げた司法省の登録は、最初九九年末でした。非伝統的宗教については、完全な宗教になるには更に十五年間かかるという状況のもとで、いまプーチン政権を迎えたわけです。

四 プーチン政権と宗教

プーチン時代になって宗教政策に何らかの変更がみられるのか、これは微妙なところです。

プーチン大統領は強い国家ということをいっておりま

つた宗教団体についてはあらゆる特権が拒否される、権利を失うということを明言しております。いま問題となっているのはエホバの証人ですが、これを登録するかどうかということが大きな問題になっております。あるいはハバロフスクで、最近バプティストのアメリカ人宣教師がやってきたことに対して締め付けをやっている、あるいはサイレントロジャー派は、キリエニコ前首相が関係を疑われたセクトですが、ここでの税務調査とか登録拒否をやって、このグループから国際的な訴えが出されているということです。

五 宗教と政治

そういうことで一応宗教団体は一瞥したわけですが、最後に宗教と政治という肝心なところになってきたわけですが、一つのパラドックスは、ロシア正教は宗教改革を否定している、あるいはアレクシー二世は宗教政党に対して極めて否定的であるということです。国家自体が宗教たらんとしていないからなのか、これは比喩的ない方ですが、アレクシー二世には宗

教が政治にコミットするということに対するある種の拒否反応があるように思います。一つは、彼に対するライバルは同じ正教の中でどちらかといえば造反的、異端的な人たちでした。ロシア正教会といってももとロシア正教自体の中でラスコリニコフとか古儀式派とかさまざまな異端がいたことはいまでもないことです。特に古儀式派はボルガ沿岸のほうに移って、宗教だけでなく商業活動をかなり熱心に行なつて、もしあのグループが育つたとすればロシアにプロテスタンティズムの倫理があるいは芽生えたのかもしれない。そういうことをいうロシア人がいるほど、そういう潮流がないわけではないのです。したがって、特に九三年の選挙の時に聖職者が議員になれるかという点で、異端派の議員が立候補したとき、アレクシー二世はこれを拒否したわけです。他方で、ある意味での大きな政治にはエリツィンと少し距離をとるためにアレクシーは共産党に寄つたり、あるいは九三年に議会とエリツィンがぶつかったときには、仲裁の労もつたということです。そういうことがアレクシー二世の

政治の中でみられるわけです。しかしこの動きの中で、プーチン政権になって少し動きは出てきて、宗教政党を作ろうというグループが、クレムリンの中とエコロジストの中で正教を巻き込んで、いまいくつか動きがあるともいわれております。これはアレクシー二世の政治路線に対するノーなのかどうか、その辺は微妙なところがあるかと思ひます。

そういう意味では正教会も、宗教政党、キリスト教民主党のようなものを作ることには基本的にはあまり動きはありません。イスラム教については、一九九五年の議会でもヌルというイスラム政党が出てきました。しかしこれはわずか三十万票、だいたい一億五千万人のうち二千万人がイスラム的な影響下にあるとすれば、そのうちの一・五％しか選挙でとらなかった、あるいはとれなかった。イスラムのさまざまな宗教組織というのは、政治的には三十ぐらいの潮流に分かれているという説がありますが、必ずしも一枚岩的な政治的な意志があるわけではない。むしろその中で問題があるとすれば、ワッハブ主義やイスラム原理主義などが

地方ではかなり影響力をのばしているということで、これはただし政党ではなく政治運動というカテゴリーに近いのだらうと思います。

その他仏教についてはほとんど触れませんでした。仏教はブリヤート・モンゴルとかカルムイク地域が中心ですが、モスクワの知識人たちの間には仏教に対する憧れというものがこの十年間かなりあります。ロシアの知識人たちの間には、オリエンタルな世界に対する関心、いわゆるユーラシア主義、ヨーロッパ・アジア主義的な人たちがかなり存在しており、そういう人たちの間にはインド文化あるいは仏教文化に対する根強い関心があります。モスクワの仏教センターというのはそういうものの表れだろうと思います。しかし、政治的にはさほど大きな比重はないかと思ひます。というわけで、現在のロシアで政治と宗教がどういう位相にあるのか、雑駁な話をさせていただきました。

(しもとまい のぶお／法政大学教授)

(本稿は、二〇〇〇年十一月三十日に行われた研究会での報告)

内容に加筆いただいたものです。